

言葉と歩く、光村の教育情報誌

とことば

tokotoba

2025

1号

特集

AIと言葉

[授業レポート]

教室の中のAI

国語

英語

連載

天気と言葉とわたしたち①

長谷部 愛

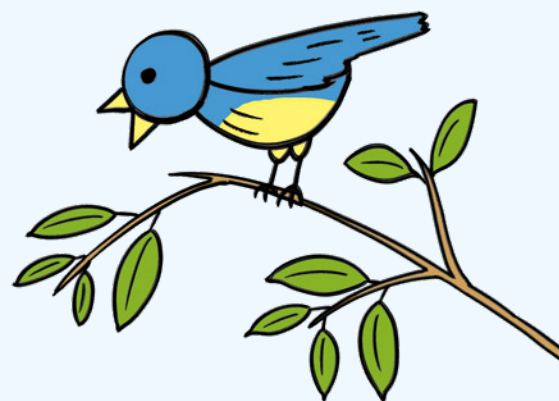
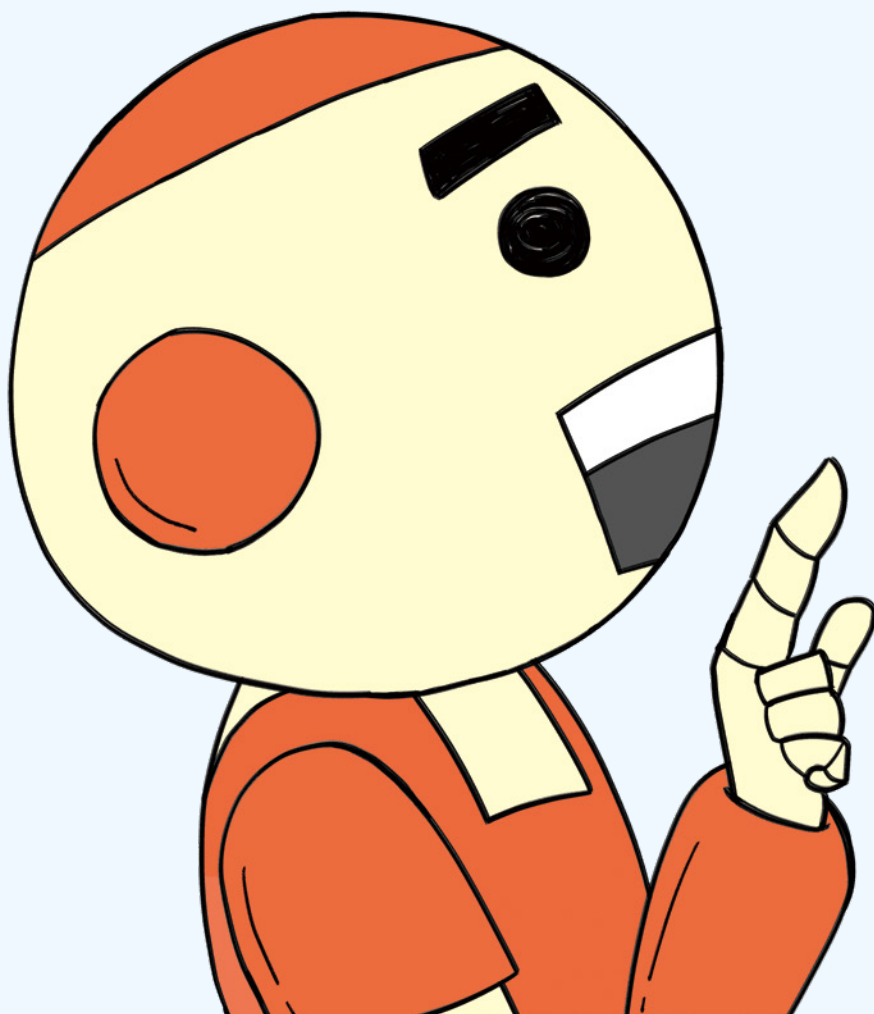
日本語と英語の行間で考える①

キニマンス塚本ニキ

創刊記念 特別企画

教科書をゆるく深掘ってみたら……

ゆる言語学ラジオ



光村図書

教授用資料

本資料は、一般社団法人教科書協会が定めた「教科書発行者行動規範」に則って作成したものです。

A I 特集 I と 言葉

わたしたちの身の回りに、いつの間にか広く浸透しているAI。

これからの時代を生きる子どもたちにとって

AIとの協働は、避けては通れないものとなっています。

AIを教育に取り入れていく中で、

言葉の学びや人と人とのコミュニケーションの在り方はどう変わっていくのでしょうか。

研究者へのインタビュー、小学校での授業レポートなどを通して、

AI時代に必要な言葉の力について考えていきます。

C O N T E N T S

インタビュー

人と人をつなぐAIの現在地

江間有沙 (東京大学東京カレッジ准教授)

授業レポート

国語 プロンプト作成を通じて思考を整理・言語化
東京学芸大学附属小金井小学校

英語 英語を話す経験値を底上げする生成AI活用
神奈川県厚木市立鳶尾小学校

インタビュー

誰もが誰かに寄り添われる社会に

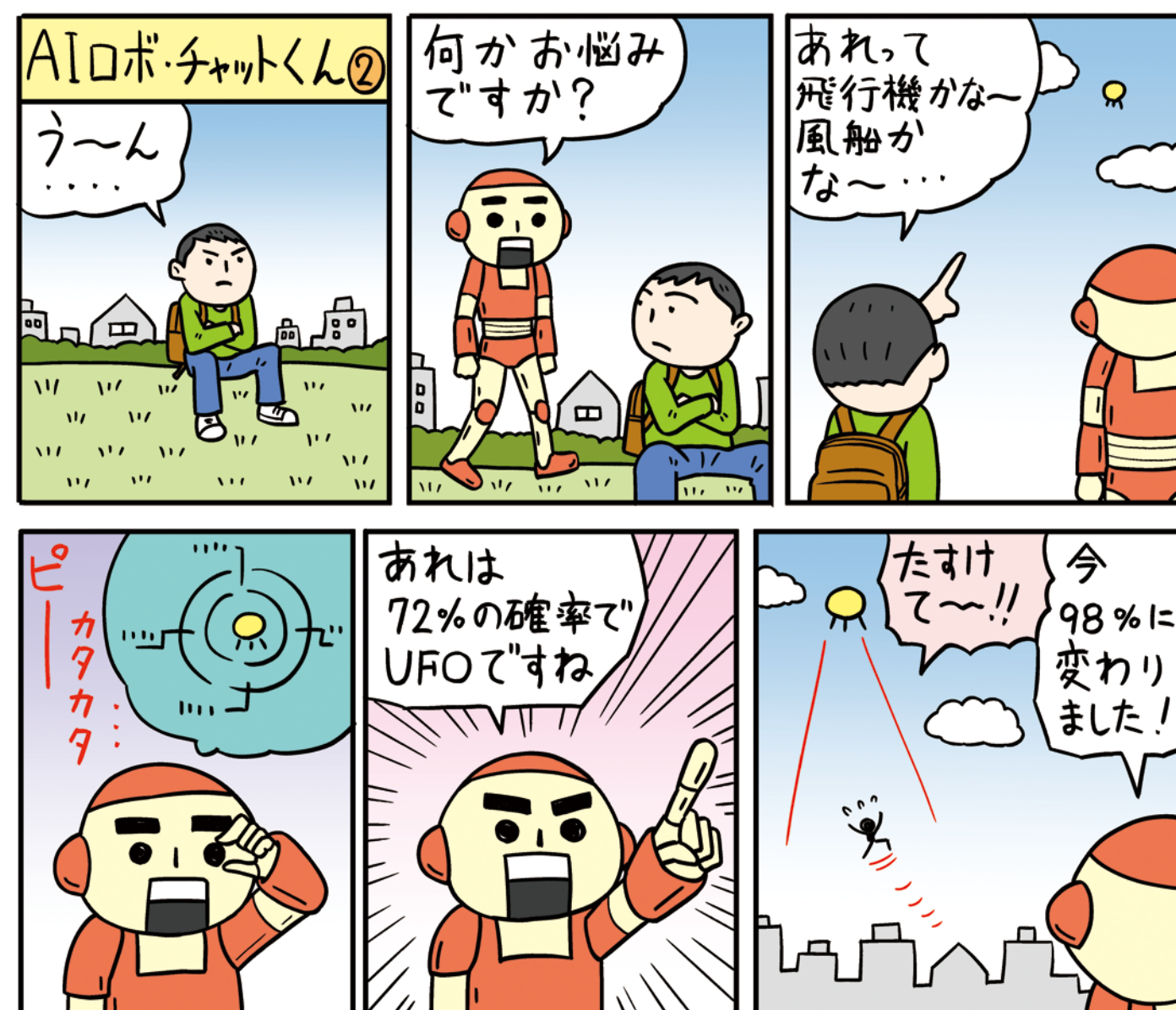
大澤正彦 (日本大学文理学部准教授)

巻頭 漫画

中川いさみ

(漫画家)

1962年神奈川県横浜市生まれ。芝浦工業大学建築学科卒業。「クマのプー太郎」がシリーズ累計100万部のヒットとなり、TVアニメ化もされる。漫画のほか、広告、挿絵、エッセイなども手がける。2003年朝日新聞広告賞を受賞。現在は、「コロコロ毛玉日記」(朝日新聞土曜別刷りbe)、「しあわせうさぎ」(小学館「ちゃおプラス」)など連載中。



人と人をつなぐAIの現在地

人間がAIと協働するときに知っておきたいこと、そして、現在、AIでできることとはどんなことでしょうか。AIを含む情報技術と社会の関係に関する研究に取り組む江間有沙先生(東京大学東京カレッジ准教授)にうかがいました。



江間有沙
EMA Arisa

東京大学国際高等研究所東京カレッジ准教授。2017年1月より国立研究開発法人理化学研究所革新知能統合研究センター客員研究員。専門は科学技術社会論(STS)。人工知能やロボットを含む情報技術と社会の関係について研究を行う。著書に『絵と図でわかるAIと社会』(技術評論社)、『分身ロボットとのつきあい方』(岩波書店)など。

AIの話をする前に

「AI」(人工知能)とは、人間のような知的なタスクを行う情報技術の一分野のことをいいます。ここには、人間のように「学習」を行う「機械学習」、そしてそれをある程度、自動で行う「深層学習」が含まれます。

現在、特に注目されているのは、学習や対話に特化したAIですが、他にも、ロボットやドローンの技術と組み合わせたものなど、AIは社会のさまざまな産業で導入されています。そして、多岐にわたるAIが浸透しつつあることで、個々人が抱く「AI」のイメージもまた多様化しています。お互いに同じ「AI」を話題にしていると思い込んですれ違いを引き起こさないよう、AIの話をするときには、「通じて当たり前」とは思わずに、「どんなAIについて話しているか」から確認することが必要な時代になったといえます。

どんな社会を望むのか

では、人間は、AIが進歩するままにその技術をすべて受け入れていくだけでよいのでしょうか。時間や手間、そして人間が陥りがちな偏見の排除も期待できそうなAIは、もはや手放すのが難しいほどに便利なものです。ただ、例えば、自動運転の技術を使って安心・安全な社会をつく

るには、単に車両だけを自動運転車に置き換えるのではなく、道路も含めた環境全体を再設計する必要があるように、AIを使ってよりよい社会を目指すには、社会の在り方そのものを、AIの使用を前提として構築し直す必要があります。

そのために、社会や組織でAIを導入するときはまず、自らが「どんな社会や組織を望むのか」から議論して、「目指す価値」を共有したうえで、導入するかどうか、導入するのならどう導入するかを決めることが、何より重要です。

AIと協働するにあたって

AIが参照できるのは、過去から現時点までのデータです。既存のデータから答えを導くAIには、既存の社会や組織を変革するような提案はできません。これは、大前提として押さえておきたいことです。

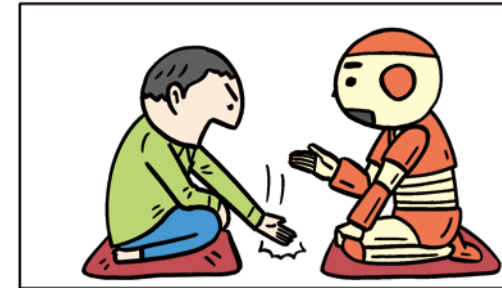
それから、何かをAIに任せる代わりに、人間の思考・判断の材料ともなる“体験”や“感覚”など、失われるものもあることは忘れずにいたいですね。そして、AIに入力されたデータは、AIの学習や開発に利用されるというのを知っておくべきことです。データ化された自分自身を差し出すことの意味もよく理解したうえで、AIの便利さを享受し、協働することが大切です。

現在、社会の中で、人間に代わってAIが行いつつあるタスクの一部を、「つなぐ」という視点からご紹介します。

“思考”をつなぐ

対話

文章の自動生成技術を使って、入力された言葉や音声に対して違和感のない応答をし、人間と対話します。



“知識”をつなぐ

要約

文章の自動生成技術を使って、大量の文章の中から重要な情報を抽出し、要点を短くまとめます。



“言語”をつなぐ

翻訳

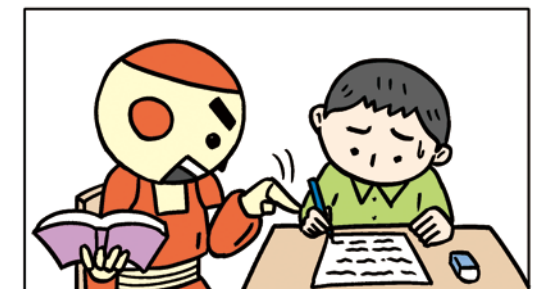
最新の仕組みでは、「深層学習」の技術を使って、膨大なデータを学習し、翻訳精度を向上させることで、自然な訳文を生成します。



“データ”をつなぐ

学習支援

学習者の習熟度、学習コンテンツ、学習履歴などのデータを分析し、個々の特徴に合わせた最適な学習カリキュラムを提案します。



“距離”をつなぐ

車の運転

カメラやセンサーからのデータ分析をもとに、車両制御の判断や予測を行い、車両を走行させます。「運転支援」から「完全自動運転」まで、さまざまなレベルの自動運転車の開発が進められています。

“経験”をつなぐ

医療の診断支援

「深層学習」で精度を上げながら大量に学習した内視鏡やX線などの検査画像データをもとに、異常な箇所を検出します。この検出は補助的なものであり、最終的な診断は医師が行います。



教室の中のAI

AIが教室に入ってくるとき、言葉の学びはどのように変わるのでしょうか。また、子どもたちとAIをどのように向き合わせたらよいのでしょうか。小学校の国語と外国語活動の事例を通して考えていきます。



東京学芸大学附属
小金井小学校
鈴木秀樹先生

プロンプト作成を通じて 思考を整理・言語化

小学校国語「構成を考えて、提案する文章を書こう」(6年)

現代社会では、生成AI(以下AI)を利用することによって、文章を効率的に作成することができるようになってきました。そのような中で、国語の授業における「書くこと」の指導では、どのようにAIと向き合っていくのか、そのヒントとなる実践をご紹介します。

AIが「書くこと」の指導にもたらすもの

文章を書くことが苦手な子どもにとって、AIはとても有効な支援ツールにもなりうる。しかし、AIは「安易に課題を解決するためのツール」ではなく、「批判的な思考力を育成するツール」「自らの創造性を高めるツール」であるということを前提として、鈴木先生は積極的に授業で活用してきた。

そして、手段としてAIを使いながらも、できあがった文章が、「これは確かに自分の文章だ」と子どもが実感できるようにすること、つまり

「文章に自分の爪痕を残す」ことが、この実践のポイントの一つだ。「すべてをAIに委ねた文章を作るのでは、もはや人が文章を作成する意味がなくなってしまう」と鈴木先生は考える。

適切なプロンプトを考える

この日の授業では、構成を考えて自分の考えを提案する文章を書く。AIに文章を作成させるためには、人間が書かせたい条件や内容をAIに伝えることが必須である。この授業では、「AIに提案文を書かせる適切なプロンプトを考える」ことを大きなねらいとした。

まずは、あらかじめ鈴木先生が用意した「提案文作成AI」[※]で、文章作成の前提条件(システムプロンプト)としてAIに求めることをクラス全体で共有しながら、子どもたちからの要望も追加していく。

「提案文作成AI」の

システムプロンプト(一部抜粋)

○子どもたちが入力したプロンプトのとおり提案文を作成してください。

○子どもたちのプロンプトは要点を絞ったものなので、適度に量を増やしてあげてください。

「構成を考えて、提案する文章を書こう——デジタル機器と私たち」単元計画

第1次(1時間)

学習の見通しをもつ
「説明する文章」「日記」「読書感想文」を実際に書いてみて、AIを利用すればより効果的になるものはどれか、書けなさそうなものはどれか考える。

第2次(2時間)

グループでテーマを決め、情報を集めて提案内容を考える
教科書を読み、デジタル機器との付き合い方についての提案を考え、提案に必要な情報を集める。

本時

第3次(2時間)

提案する文章の構成を考え、文章を作る
教科書の作例を分析して提案文の構成を考え、AIを活用して提案文を作成する。

第4次(2時間)

クラスで文章を読み合い、感想を伝える
子どもたちどうして読み合うとともに、AIにも評価させる。

○専門用語は避け、小学校6年生がわかるような書き方をしてください。

そして、子どもたちそれぞれが、自分の考えをAIに伝えるために必要な項目(ユーザープロンプト)をクラス全体で意見を出し合いながら洗い出していく。

自分のプロンプトには どんなことを入れる？

- ・文章の構成
- ・提案文のタイトル
- ・何についての提案文か
- ・課題や解決策についての自分の考え
- ・より読者に伝えやすくするために予想される反論
- ・自分の調べたこと
- ・読者への呼びかけ
- ・お題に対しての現在の課題
- ・参考資料
- ・文章全体の量
- ・実際にあった出来事

プロンプトを直接入力するのが難しい子どもには、鈴木先生が「お助けAI」と名付けた仕組みを作り、一問一答形式で入力することによってプロンプトを完成させるという方法も取り入れた。

「お助けAI」の

システムプロンプト(一部抜粋)

- ・提案のきっかけとなったあなたの体験を教えてください。
- ・提案のきっかけとなった調べてわかったことを教えてください。
- ・提案の内容を教えてください。
- ・この提案で人々に何を呼びかけたいのかを教えてください。

プロンプトを打ち込むと、AIが何らかの提案文を出してくる。子どもたちはそれを読み直して「ここを直して」「この言葉を加えて」「ここの根拠をもっとくわしく」などAIに修正依頼。すると、AIが修正された提案文を出し、子どもたちは再びそれを読み直して自分なりの言葉を付け加えるなど、納得いくまで修正を重ねていった。これがまさに、先生が考えていた「文章に自分の爪痕を残す」ということにつながっているのだ。

これからの 「書くこと」の指導で 必要なのは

この授業を通して印象に残ったのは、子どもたちがプロンプトを考える中で、自分の考えを整理し、言語化している姿だ。「書くこと」の学

実際に子どもが入力したプロンプトと、作成された文章の例はこちらからご覧いただけます。



「お助けAI」を使って文章を作成していく例



あなたが書きたい提案文のタイトルを入力してください。

オンラインゲームについて



次に、オンラインゲームについての提案のきっかけとなったあなたの体験を教えてください。

夜遅くまでゲームをやってしまった



ありがとうございます！次に、オンラインゲームについての提案のきっかけとなった調べてわかったことを教えてください。

体を動かすこと
制限時間を決める
携帯の中に時間制限できるアプリがあるからそれに頼る
ゲームより楽しいことを考える



習では、従来こうしたことは自明のこととして行われてきたが、AIの時代に向かう今だからこそ、ここを丁寧に考えていく力がますます必要になっていくのだろう。そこがしっかりしていれば、あとはAIの得意分野である、効率的に要素を整理してまとめる技術に委ねることが可能となる。

鈴木先生は、「子どもたちは、生成AIを活用して、自分が納得のいく提案文を書くことは可能かを真剣に問いながら、提案文について深く考えていた」と振り返る。一般社会での効率的に文章を作成するような使い方とは異なる「教育の現場」ならではのAIとの向き合い方を示唆する実践だった。



神奈川県厚木市立鷹尾小学校
なり た じゅん や
成田潤也先生

英語を話す経験値を底上げする 生成AI活用

小学校外国語活動「What time is it?」(4年)

「とにかく『易きに流れる手段』と捉えられがちなAIを、主体的・協働的かつ個別最適な学びを促進するツールとして位置づけたい」と、精力的に実践・発信をされている成田潤也先生。実際にどのようにAIを活用されているのか、外国語活動の授業での取り組みを紹介します。

AI自動翻訳で、 一人一人が言いたいことを 瞬時に英訳

今回取材したのは、『Let's try! 2』のUnit4「What time is it?」の4限目。テキストどおりの内容を2時間で教え、残り2時間を発話練習の活動に充てている。好きな時刻と、その時刻が好きな理由を尋ね、答えるという内容だ。トークと歌でのウォーミングアップをテンポ良く終え、会話の例文を、どのように言うか問いかけて思い出させながら板書していく。

Q. What's your favorite time?
A. I like 3:00 p.m.
Q. Why?
A. Because it's snack time.

「では、この前皆さんが作ったスライドを開きましょう」。成田先生は授業では、オンラインのデザインツール「Canva」*を使う。Canvaではスライド作成に加え、さまざまなAI機能を使うことができる。

前時は、各自が言いたい文章(Q&AのAに当たる部分)を、AI翻訳で英語に訳す作業を行った。お手本の日本語文が記載されたテンプレートのスライドを共有し、各々の言いたい内容に書き換えてもらう。CanvaのAI自動翻訳機能を使えば、ワンクリックで訳文を作成できる。ポイントは、4年生が英語で言える内容にするために、日本語の段階でできるだけ簡単な文章にしておくことだ。

AI音声生成で、何度も発音を 確かめながら発話練習

続いての発話練習でも、CanvaのAI機能が活躍する。AI音声生成ツールを使うと、各自の英文が自然な発音で再生されるのだ。

「これからこの音声を聞きながら自分で言えるように練習する時間を取ります」。成田先生が告げると、教室には、子どもたちがそれぞれの音声を繰り返し再生する音と、練習をする声が響いた。成田先生が巡回し、やり方がわからずにいる子どもたちをフォローしていく。隣の席や近くの子ともどうしても操作方法をきき合い、教え合う姿が見られた。

AI画像生成で、 イメージの共有をスムーズに

「練習はもうばっちりという人は、自分の言いたいことに合った画像を生成してみてください」と成田先生が声をかけると、子どもたちはCanvaの「マジック生成」を開いた。英文を指示文として貼り付けると、英文の内容に合った画像を複数パターン生成してくれる(図1参照)。例えば「snacktime」と入力するとおやつを食べている様子が生成される(図2参照)。各々好きな画像を選んでスライドに貼り付けていく。

スライドが完成したら、グループ

ワークの時間。3～4人の班を作る。発表者以外の子どもたちが「What's your favorite time?」「Why?」と質問を投げかけ、発表者はスライドを見せながら答えていく。画像生成で作ったイメージが、伝えたいことを友達に共有する助けになる。「上手に言えたら拍手してあげて。Good Jobって言ってあげてね」と先生がリアクションを促した。

得意か苦手かに関係なく、 全員が「英語を話す」 経験を積める

最後は一人ずつ、全員が発表する活動。全体共有用のスライドに、各自の発表資料をコピー＆ペーストさせる。ものの数分で先生の手元に全員のスライドが集まった。グループワークと同様にみんなが質問していき、一人一人順番に、大型モニタにスライドを映しながら、自分の言いたい内容で答えていく。10分ほどで、20人全員が質問に答えることができた。

以上のように、英語の授業でAIを活用することで、次の三つのことができるようになる。

●AI翻訳で、一人一人が本当に表現したいことを支援できる

●AI音声生成で、教師の助けがなくても子どもが自力で発音を確認できる

●AI画像生成で、本質的ではない作業に割く時間を減らし、言語活動の時間を最大限確保できる

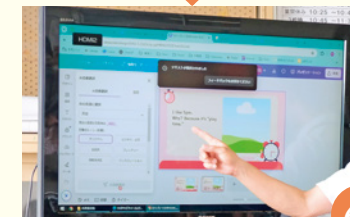
今回の授業は先生にとってもチャレンジングな提案だったそうだが、子どもたちは、技術的なまどいを

本時の流れ



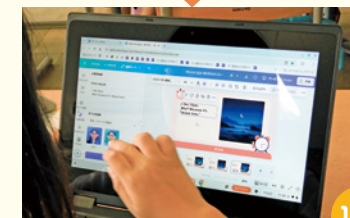
1.ウォームアップ

「How are you?」と尋ね合うトークの後、時刻の言い方をおさらいする歌を歌う。



2.前時の復習

前時は、三つのAI機能を使って自分の言いたい文章の翻訳、音声生成、スライドに載せる画像作成を行った。



3.個人練習

AI音声生成で作った自然な発音の音声を聞いて、各自が言いたい内容を英語で言えるように練習する。



4.グループワーク

グループになり、作成したスライドを見せ合いながら、一人ずつ質問→応答の練習をする。



5.全体発表

各自のスライドを共有して一つのデータにまとめ、大型モニタで表示。自分の作った文章で一人ずつ質問に答える。

ものともせずにAI機能を使いこなし、授業時間の半分以上を言語活動に充てることができていた。

「AIを使うことで、全員が英語を話す経験値を底上げすることができます。大事なことは、英語を話すことに対する抵抗感をなくすることです。まずは英語に対してポジティブな気持ちを育てること。その気持ちのうえに、初めてスキルが乗ってくるんです」と成田先生は話す。これからの時代、必要不可欠になる技術に早い段階から慣れ親しみ、使いこなせる力を育ててほしいという思いももっている。

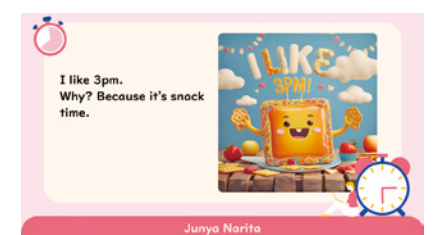


図2 AI画像生成で作ったイメージの例

「今はまだ新しい技術に慣れていない子も多いですが、将来的にはAIを『自分が必要なときにサポートを求める相棒』にしてほしいと思っています。高学年の授業でも継続的に使うことで、AIを当たり前前に使いこなし、英語を自ら学び続けられる子に成長してほしいです」。



AIと ともに過ごす 未来

誰もが誰かに寄り添われる社会に

幼い頃から「ドラえもんをつくる」という夢をもち続け、現在はAIの研究者として大学で教鞭を執る大澤正彦先生(日本大学文理学部准教授)。
これから先、人とAIの関係性はようになっていくのか、また、AIの進化によって、人と人の関係性はどうなるのか、お話をうかがいました。

——大澤先生の研究内容を教えてください。

僕の研究内容は、一言で言うなら「ドラえもんをつくる」ことです。ご飯を食べたい、眠りたい、と思うのと同じくらいの感覚で、幼い頃からドラえもんをつくりたいと思い続けて生きてきました。現在は、AIや神経科学、認知科学などさまざまな分野の知見をもとに、大勢の仲間とともに、ドラえもんづくりを進めています。

ドラえもんといえば、「青い猫型のロボット」「のび太の友達」「便利な道具を出してくれる」など、人それぞれがイメージする側面がありま

す。僕はすべての側面を大切にしつつ、チームで分担して研究に取り組む中で、「心って何なのか」「心が通じ合うとはどういうことなのか」といった、人の心に着目した技術開発を担当しています。

——ドラえもんづくりを進める中で、人と人の交流を促すAIも開発されているそうですね。

AIの研究をしていると、「人とAIの共存って、というのが理想ですか」ときかれることがあるんです。でも、人とAIの共存を考える前に、そもそも人と人は、本当の意味で共存できているのかなと疑問に思うことがあります。例えば、性的マイノ

リティといわれる仲間ができたときに、こんなにいい人がこんなことで苦しんでいるのは嫌だなと思いました。ダイバーシティ推進という抽象的な言葉だけだと僕はぴんとこないのですが、仲間の顔が思い浮かぶと、なんとかして力になりたいと思います。もっと人と人が交流できる仕組みがあれば、お互いの理解につながり、苦しんでいる人の力になれるのではと考えました。

それから、自分自身の研究を進めるうえでも、人と人をつなぐ手段の必要性を感じていたんです。ドラえもんづくりは、とうてい一人ではできないことなので、大勢の仲間をつ

くって活動をしてきましたが、自分の手でコミュニティを広げるのは数千人ぐらいが限界です。仲間どうしの協力って、人類の歴史を見てもずっと課題だったはずで、世界中のみんなと一緒にがんばれる仕組みはまだない。じゃあ、AIの技術を使って、それを実現できないかと考えたんです。現在、大学の授業に実際に取り入れています。

——そのAIは、どんなものなのでしょう。

一つは「メンタリングAI」とよんでいるもので、学生が自分の目標を考えるとときに相談に乗ってくれるAIです。プロのコンサルタントのフレームワークをベースに、ただ言葉を交わすだけでなく、“心がある”と思ってもらえるようなやり取りを行います。

二つ目は「マッチングAI」。学生が見つけた目標を実現するために、「この人と組んだらどう？」などと提案してくれます。

三つ目が「マネジメントAI」で、チームで活動するときの管理面をサポートします。タスクだけではなく、気持ちのケアとかモチベーションの維持などにも貢献します。

この三つを組み合わせるとコミュニティAIとよんでいます。AIを導入する前は、こうした支援を全部自分でやっていたんです。80人の学生一人一人に向き合うのは、やりがいも効果も感じましたが、どう考えても、これを800人に増やすことは難しい。一人一人をしっかりサポートするためにはAIの助けが必要だと思いました。

——これからAIとともに過ごしていくことになる子どもたちに、AIとの付き合い方について、何かアドバイスをいただけないでしょうか。

5歳の娘がいるんですけど、幼い頃から遊び感覚でAIに触れさせています。好奇心というのは、「ちょっと知ってて、ちょっと知らない」くらいのときに生まれるものなので、その下地づくりができればと思っています。AIとの付き合い方に正解はありませんが、今後、AIの影響が大きくなるのは間違いないと思います。まったく触れないまま大人になると、思わぬ失敗をしてしまうかもしれない。だから、「テクノロジーの予防接種」みたいな感覚で、小さい頃に少しでも経験しておくのがいいのではないのでしょうか。

——大澤先生が思い描く未来の生活はどんなものでしょうか。

人の数だけ理想の未来があると思います。だから、神様のような誰か一人が未来を描くのではなく、選択肢が増える未来が理想だと思っています。本来、技術が進んだぶんだけ選択肢が増えて、人が幸せになっていくはずなのに、今は、技術が進んでも、幸せになった実感がある人は少ないように思います。なぜなら、効率化や合理化ばかりが優先される世の中になっているからではないでしょうか。例えば、1日8時間でやっていた仕事を半分の時間でできる技術が生まれたとき、「家族と過ごせる時間が増えてハッピー」という選択肢もあるはずなのに、「倍の仕事をこなしましょう」になってしまう。

それに、人と人との関わりって効率化できないものですから、学校の先生や保育士さん、介護士さんとか、人に寄り添う仕事をしている人たちにしわ寄せがいつている気がします。人と寄り添うことの価値がもっと高まって、一人も取り残すことなく、誰もが誰かに寄り添われる社会になったらすてきだなと思います。技術の力で、人が人に思いっきり寄り添える社会を実現できるよう、イノベーションを起こしていきたいと考えています。

大澤正彦 OSAWA Masahiko

日本大学文理学部情報科学科准教授。次世代社会研究センター(RINGS)センター長。博士(工学)。
1993年生まれ。学部時代に設立した「全脳アーキテクチャ若手の会」が日本最大級の人工知能コミュニティに発展。IEEE CIS-JP Young Researcher Award(2015年)をはじめ受賞歴多数。孫正義育英財団アラムナイ(2017年認定)。グローバルな活躍が期待される若きイノベーターとして「Forbes JAPAN 30 UNDER 30」2022に選出。著書に『ドラえもんを本気でつくる』(PHP新書)など。





気象予報士としての知識や経験をもとに、天気や自然現象を表す言葉にうつし出される人々の感性や文化、ものの見方・考え方などを紹介していきます。

第1回 雨は 心情を映し出す鏡

「秋^{しゅうりん}雨」「秋霖^{づゆ}」「すすき梅雨^{あきじめ れいう}」「秋湿り^{なごめ}」「冷雨^{れいう}」は、秋の雨を表す言葉です。秋雨や秋霖は、梅雨ほど激しくはないものの、9月から10月頃に秋雨前線により、しとしと降り続く長雨を指します。すすき梅雨は、同じ長雨の時季ですが、すすきが黄金色に染まる頃の雨を意味し、秋の風情を感じさせます。秋湿りはジメとした長雨を、冷雨は気温が下がってきた晩秋の頃の冷たさも伴った雨で、どこか寂しさやものの思いにふける情緒を誘います。

他の季節にも同じように雨の言葉があり、花曇りの空から落ちてくる優しい春雨、激しく打ち付けるような夏の夕立、凍えるような冷たい冬の雨とさまざまです。また、小雨から激しい雨まで、雨の降り方や量を表す言葉も豊富です。「篠突く雨^{しのつ あめ}」は細い竹が突き刺さるように降る激しい雨を、「小糠雨^{こぬかあめ}」は細かい糠のような小雨を指します。



写真：K@zuTa / PIXTA (ピクスタ)

「甘雨^{かんう}」や「干天の慈雨^{かんてん しゅう}」は、恵みの雨を意味し、感情に強く紐づいています。干天の慈雨は日照りのときの恵みの雨を表すため、そこから転じて困ったときの救いの手にたとえて使われます。その他にも「涙雨^{なみだ あめ}」は悲しみの涙が化して降る雨という意味をもっています。ふだん私が気象予報士として言葉を紡ぐときもそのような背景を意識しています。

雨に関する言葉は、古くから和歌や俳句の中で、季節や人の情感を巧みに表現するために用いられてきました。現代においても、雨のイメージは、小説や絵画、ドラマ、映画、漫画など、多様な表現の形の中で豊かに使われ、表現の世界に彩りを加えています。雨が降りやすく、諸外国に比べて雨の降り方が多様な日本では、雨は、人々の心情を映し出す鏡のような存在だと感じます。悲しみや切なさを表すものもあれば、浄化や希望、再生を象徴するものとしても捉えられています。

それは、季節や人生のさまざまな場面で降る雨が、人それぞれの感情や思いと深く結び付いているからで

しょう。そして、雨にまつわる表現を使うことで、私たちは季節の移ろいや自然の営みをより深く感じ取り、心情をつぶさに伝え合うことができますのではないのでしょうか。心の奥底にある情緒や文化を言葉が育んできたともいえそうです。

と もしれば命の危険を伴う雨でありながら、私たちは古くから季節ごとにその空を見つめ、そこに紐づく自分の思いをのせてきました。雨を表すあまたの言葉の中に、自然の厳しさと美しさ両方を受け入れる、そんな日本の人々のたくましさ、自然と共存して生きていくという自然観を強く感じるのです。

長谷部 愛 HASEBE Ai

気象予報士、東京造形大学非常勤講師。1981年神奈川県生まれ。信州大学教育学部卒業。テレビ・ラジオ局員として、番組制作・キャスター・リポーターを経験後、2012年に気象予報士資格を取得。翌年からTBSラジオ、Yahoo! 天気・災害動画などに出演。2018年から東京造形大学で教鞭を執る。著書に、『天気とよみとく名画』(中央公論新社)など。

日本語と英語の 行間で考える

幼少期より日本語と英語を使い分けながら、それぞれの表現やコミュニケーションについて考えてきたニキさんの視点で、これらの魅力や ままならなさをポップにライトにつづります。



イラスト：水沢石鹸

第1回

「AIがあれば通訳はいらない」 って本当ですか？

まさか自分が生きているうちにAIに仕事を脅かされる時代がくるなんて、ほんの数年前までは想像もしていなかった。フリーの通訳・翻訳業を15年ほどやってきた自分の世代なら逃げ切れるだろうと根拠もなくたかをくくっていたら、スマホの中の人工知能がいくつもの言語をほんの数秒で、しかもほぼ完璧な状態で変換できてしまうという衝撃の現実と直面している。自分が長年積み重ねてきた経験もスキルも、流行りの無料アプリごときに負けてしまうのかと思うと、なんともやるせない焦燥感にかられる。

とはいえ、ジタバタあがいても時代の変化は止められない。遠出をするなら駕籠^{かご}担ぎに、恋文を送るなら代筆屋に、映画を観るときは弁士に、電話は交換手に、データ処理はキーバンチャーに。そうやって昔から頼られてきたいくつもの専門職が技術の進歩とともに自然淘汰され、職を失った人々は生きるために別の道を探さざるをえなかっただろう。わざわざ人間に翻訳や通訳をやらせるなんて時代遅れだ、と言われるようになるのも時間の問題かもしれない。

もちろん、こちらも一応のプロとして簡単に引き下がる気はないし、今後どれほど技術が発達してもAIがすべての異言語コミュニケーションを完全に代替できるようになるとは思えない。これは技術がどうこうというより、人としての意地だ。本音を言えば、人間どうしの関わりを支える役割を、同じ人間でなくAIに頼る人が多数派になった世界を想像したくないのだ。

これまでいちばん苦勞した通訳現場の一つに、ある有名なアメリカのロックスターと高名な日本人彫り師

が同席した会食がある。酒が進むにつれ二人とも饒舌になり、昔の自慢話や大人のジョークから歴史や文化論などのインテリ話へと、楽しい会話が延々と続くなか、私は場の空気を壊さないように、笑顔のままトイレを我慢して必死に通訳しながらサラダやパスタを取り分けていた。3時間以上に及んだ怒涛のディナーが終わる頃には心身ともにヘトヘトだったが、「自分にしかできない大仕事を成し遂げた」という達成感とアドレナリンがみなぎっていたのを覚えている。知的好奇心と表現力あふれる多才な人たちの会食は、ただ言葉を変換するだけでなく空気を読みながら同じ好奇心とテンションを保てる人間が間にいたから成り立ったんだと自負している。そして言語も文化も世代も異なる、良くも悪くも人間臭くてクセの強い二人の「伝えたい、伝えてほしい」という気持ちが一致したからこそ、あの独特のグルーヴ感が生まれたんだろう。

人間どうしのコミュニケーションに完璧なんてものはありません。思いつきで喋ったり、何を言いたいのかわからなくなったり、ちっとも噛み合わなかったりしながら、それでも何かを日々伝え合おうとしている。そんな気まぐれで不完全な人間のチグハグなコミュニケーションを補佐しようとする行為が人間を人間たらしめるんだと思う。たとえいつか世界中の人間の交流がAIを通して行われるようになったとしても、私は人として伝えようとする試みをやめずにいたい。

キニマンズ塚本ニキ Nikki TSUKAMOTO KININMONTH

通訳・翻訳家・ラジオパーソナリティ。1985年東京都生まれ。9歳から23歳までニュージーランドで暮らし、オークランド大学で社会学・ジェンダー学・映像学などを学ぶ。日本に帰国後、フリーの通訳・翻訳者として国内外の社会課題の啓発や対話の現場に携わる。TBSラジオ「荻上チキ・Session」やYouTubeチャンネル「ボリタスTV」などのレギュラー出演、雑誌コラムを通して発信中。著書に『世界をちょっとよくするために知っておきたい英語100』(Gakken)がある。

ゆる言語学ラジオ&光村図書コラボ企画

言語系のYouTube人気チャンネル「ゆる言語学ラジオ」さんと光村図書「とことば」のコラボ企画が実現しました！小・中学校の国語教科書について、ゆるく楽しく分析していただいた動画がゆる言語学ラジオYouTubeチャンネルにて公開中です。そして、本誌では、パーソナリティの水野さんが教科書での学びについて、動画とはまた違った角度から分析してくださいました。それぞれのテイストをどうぞお楽しみください。

教科書をゆるく深掘ってみたら……

水野太貴 (ゆる言語学ラジオ パーソナリティ)

「日本は単一言語の国である。マルカバツか？」

いきなりマルバツ問題から始めてみたが、これに自信をもって解答できる人はどれだけいるだろうか。答えを発表すると、バツである。

数え方にもよるが、ユネスコでは、日本で話される言語は9つとしている。「思いのほか多い！」と驚いたのではないだろうか。

例えばアイヌ語だ。「ラッコ」や「シシャモ」などはアイヌ語が語源だが、日本語とは系統的に無縁である。

それから、言語学では沖縄の言葉を日本語とは異なる言語としてカウントする。もっと言うと、沖縄の言葉の中にもいろいろある。^{あまみ}奄美語、^{くにがみ}国頭語、^{やえやま}八重山語、^{よなくに}与那国語……島ごとにそれぞれ独自の変化を遂げたこれらの言語は、話者が減り、消滅の危機に瀕している。

驚いたのは、こうした事実が国語教科書に載っていることだ。中学1年生の教科書には言語研究者の木部

^{のぶこ}暢子氏が寄稿し、消滅危機言語の現状を紹介している。自分が中学生の頃にはこんなことは載っていなかった(ただ自分が忘れていただけかもしれないが……)。

もう一つ、日本で話されているのに、私たちのほとんどが気づいていない言語がある。手話だ。「日本語をジェスチャーで置き換えたものじゃないの？」というのもよくある誤解で、日本手話と日本語は文法がまったく異なる別の言語だ。手話についても、小学5年生の教科書には記述がある。そこには「手話が世界共通ではないこと」「日本手話の中にも方言があること」などといった、基礎的な情報も盛り込まれている。

関心の貯金

ある経済学者がこんなことを言っていた。「関心とは、実は各人が持つ資産なのではないか」。

この視点は、私たちにさまざまなことを教えてくれる。一つに、人それぞれ財布の中身が違うように、関

心の総量は人によって異なるということ。続いて、お金をコツコツためて旅行に行く人もいれば、給料が入ったらすぐ飲みに出かける人がいるように、人は関心を自分が消費したいように消費すること。そして、お財布の中身がカツカツであれば食費や家賃、光熱費といった生活に直結するものに回すのと同じように、関心の余裕がなくなると、人は生活に直結するものや、すぐに役に立つものを追い求めること。

大人になって仕事を始めると、とたんに忙しくなり、生活の余裕がなくなる。「余裕がなくなる」というと金銭や時間のことばかりフォーカスされるが、僕はそこにもう一つ加えたい。関心の余裕もなくなるのだ。『なぜ働いていると本が読めなくなるのか(三宅香帆 著/集英社)』という本がベストセラーになったが、僕なりの回答はこうだ。「忙しい日々で関心の貯金がなくなり、生活に直結するものにしか振り向けられなくなったから」。

教科書での学びが花開くとき

先ほど示したように、人は特に何も干渉されないと、自分の関心を自由に消費する。僕なんかは今、余暇があれば好きな本を手に取り、知識欲を満たして楽しんでいる。ところが、それだけではマズいことがある。例えば、差別や偏見だ。ぴったりの例があるので、紹介しよう。

2020年から世界中で猛威を振るった新型コロナ禍で、手話を用いるろう者たちは困惑していた。彼らはマスクを着けるのを嫌がったのだ。なぜだろうか？

小学5年生の教科書にはこうある。「手話は、手の形・位置・動きと、表情や身ぶりで成り立つ言語です。」

ポイントは「表情」だ。実は日本手話において、口元の動きは非常に重要な情報であり、それがマスクで見えないとコミュニケーションに支障をきたすのである。一般的に、手話話者は声を出すことが少ないから、マスクを外していても飛沫感染のり

スクは小さい。ところが見た目では聴者と区別がつかないため、マスクを外して厳しい目で見られたろう者もいたそうだ。

ほとんどの人は、手話というと手を使った言語だと思っている。だからろう者がマスクを外したがる理由がわからない。「俺たちは我慢しているのに、どうして」と憤ってしまう。まさに知識不足に基づく誤解だ。

この問題はどうやったら解決できるだろうか？ 僕が大人になって思うのは、義務教育とは「関心のパターンリズムではないか」ということだ。本来自由であるはずの関心の消費先を、パターンリスティックに決めてしまう。「パターンリズム」というとネガティブな印象もあるかもしれないが、僕は決して悪いことばかりではないと思っている。

パターンリズムがてきめんに効果を発揮するのが、差別や偏見への啓蒙だ。今回の原稿に即して言うなら、手話もアイヌ語も沖縄の言葉も、今もなお誤解され続けている。こうし

たテーマに、子どものうちに触れさせておく。その場では意味を完全に理解してもらえないかもしれないが、その種は必ずどこかで花開くはずだ。

国語の教科書には、言葉を使う私たちが関心を振り向けなければならない重要なトピックがふんだんに盛り込まれている。その意義に気づいたのは、数年前に、「差別する人は悪意をもってやっているとは限らず、自分のような知識のない人間こそしてしまうのかもしれない」と自覚したからだ。僕の場合は花開くまでに10年以上かかってしまったが、こうして再び教科書を開いてみて、大事なことに気づけた気がする。また数年後に開いてみたら、きっと新しい花が咲いているのだろう。

水野太貴 MIZUNO Daiki

1995年生まれ、愛知県出身。名古屋大学文学部卒。専攻は言語学。出版社で雑誌編集者として勤務。著書に『会話の0.2秒を言語学する』(新潮社)、『きょう、ゴリラをうえたよ』(KADOKAWA)などがある。



ゆる言語学ラジオとは

言語オタクの水野太貴さんと、言語学素人の堀元見さんが、ゆるく楽しく言語の話をする、YouTube & Podcast番組。「springはなぜ春もバネも意味するの?」「『象は鼻が長い』の主語は象?鼻?」などの身近なトピックから、多くの人を果てしない言語沼に引きずりこんでいます。

9月中旬公開! 国語の教科書を15年ぶりに読んじゃおうぜ!!!!

ゆる言語学ラジオならではの視点で、小・中学校の国語教科書をゆるく深掘り。ブラックジョークなども交えながら楽しいトークをお届けします。



ゆる言語学ラジオ
YouTubeは
こちら



「言葉の時代」は終わらない。

心を伝える。感性が豊かに響く。理性をしっかり構築する。

AIの主人となる。国境を、人種を、文化を、軽々と超えていく。

すべては、言葉が成し遂げる。「生きる」のふもとに言葉がある。

私たちは、光村。言葉の力を紡ぐ者。

力ある言葉を、あらゆる面から追究し、届け、

それがまた次の世代へと受け継がれるようにと願って、

終わることのない言葉の時代を切り拓いていく。



竹紙のふるさとを訪ねて

教科書をはじめ、ほとんどの書籍やノートなどは、針葉樹や広葉樹などの木材を原料としたパルプから作られています。

教育情報誌「とことば」は、こうした木材由来の紙ではなく、竹を100%原料とした「竹紙」に印刷しています。竹の繊維は細くて長いので、独特のハリや風合い、存在感を感じていただけます。また、表面が滑らかで字が書きやすいため、ノートなどの製品も開発されています。さらに、竹紙は、森林や里山の保全再生、生物多様性の保全に役立つとともに、竹に新たな価値を生み出し、地域経済にも貢献しています。

「とことば」編集部では、竹紙を製造している鹿児島県薩摩川内市の中越パルプ工業(株)川内工場や、竹の生産農家、竹を製紙材料に加工しているチップ工場などを訪れ、さまざまな工夫や苦労話をおうかがいしました。



詳細は、こちらから。

みつむら
web magazine



原料となる竹を栽培している
鹿児島県さつま町の三腰初二さん(90)



光村図書ウェブサイト

光村図書

検索



小・中・高等学校
教科書訂正のお知らせ



光村図書
LINE公式アカウント
友だち募集中!



とことば
tokotoba

1号

2025年9月26日発行

発行者 ● 吉田直樹

発行所 ● 光村図書出版株式会社

〒141-8675 東京都品川区上大崎2-19-9

電話 ● 03-3493-2111

www.mitsumura-tosho.co.jp

デザイン ● 深山貴世(ZONOCO)

印刷所 ● 協和オフセット印刷株式会社

個人情報の取り扱いに関しては、弊社「個人情報保護方針」に則り、適切な管理・保護に努めてまいります。
詳しくは、光村図書ウェブサイトをご覧ください。

教育情報誌に関するお問い合わせ先
住所変更・配送停止 ▶ ej1@mitsumura-tosho.co.jp
ご意見・ご感想 ▶ koho@mitsumura-tosho.co.jp